# 現代文学における「姨捨の系譜(三)

## ――蟻通明神のこと(二)――

工藤　茂

## 二（承前）

蟻通明神にかかわる文献で最も古いのは、おそらく『貫之集』であろう。これは貫之自身が、折りにふれて出来た歌を書きつけていたと『大鏡』に語られている、彼の私家集である。その第十[1]（一本によると九）に、次の歌が収められている。

かき曇りあやめもしらぬ大空にありどほしをば思ふべしやは[2]

一見して意味がすうっと通らないのは、「ありどほし」の語の意味が判然としないからである。引用した『新校群書類従』の本文が「ありとほし」ではなくて、「ありどほし」と濁っているので、かえって意味が分りにくくなっている。そこで「と」の濁点を取ってしまい、歌の意を推察しながら漢字を宛ててみると、「有り、と、星」つまり、「星有りと」となる。こうすると、この歌の表の意味が通る。すなわち、空が曇っていて星があるとは思いもよらなかった、というのである。それなのになぜ「ほしありと」とせず「ありどほし」と表現したのであろうか。

実は、この語はいささか工夫のこらされた掛詞だった。この歌の前に付された次の詞書を読むと、「ありどほし」とうたったその理由が納得される。

紀の國に下りて、かへりのぼる道にて、俄に馬のしぬべくわづらふ所に「て」道行く人（々）立ちどまりていふやう、是はこゝにいましつる神のし給ふなむ。とし頃やしろもなくしるしもなけれど「いとかしこくて、いましける」（うたてある）神也。さきざきか（う）やうにわづらふ人々ある所也。いのり申給へ「よ」といふに、みてぐらもなけれ

ばなにわざすべくもあらず、たゞ手を（かき）あらひてひざまづきて、神いますかげもなき(イ)やまかたにむかひて、そもそも何の神といふといへば、ありどほしの神となむ申すといひければ、是を聞きてよみ奉る歌なりそのけにや、馬の心ち「も」やみにけり

これを要約すると、次のようになろうか。

神社もなければ神のしるしも見えないところだったので、貫之は知らずに馬を乗り入れてしまった。するとたちまち馬が倒れてしまった。通りがかりの人が、それはここの神のしわざだから祈りなさいと教えてくれた。そのとおりにお祈りをしてうかがうと、ありどほしの神だという。そこで歌を作って奉った。そのせいか、馬も生きかえったというのである。

したがって先の歌の「ありどほし」とは、ありどほしの神のことだった。その神の神域を犯した理由と許しを乞う気持が、この歌の裏にこめられていたのである。すなわち、空が曇っていて星のありかが分らない、そのように、それといったしるしのないここが、ありどほしの神の神域とも知らず馬を乗り入れてしまった罪をお許し下さい、というのが、この歌の意であった。

さて、右の貫之の故事を手ぎわよく要約して、このありどほしの縁起を紹介しているのが、前に述べた『枕草子』である。その段は、次のような文章で始まっている。

蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神の病ま③せ給ふとて、歌よみてたてまつりけん、いとをかし。

清少納言はこの文の直後に、「この蟻通とつけけるは、まことにやありけん」という感想（疑問）をはさんだうえで、前述の話を書きとめている。そしてこの段の最後を、次のような文章で締めくくっている。

さて、その人の神になりたるにやあらん、その神の御もとにまうでたりける人に、夜現れてのたまへりける。

七曲にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとは知らずやあるらん

とのたまへりける、と人の語りし。

「その人」には二つの解釈があって、その一つは親孝行の中将とするもの、もう一つは中将の親とする説である。「七曲にまがれる玉の緒をぬき」たる知恵、つまり蟻を使って曲りくねった玉の孔に緒を通した知恵を持っていた者が、神となって祀られたので蟻通明神と呼ばれたというのであるから、中将の親がその神となって顕現したととった方が自然であろう。ところが、後世出版された、『室町時代物語大成第二』（角川書店）に収められている草子では、中将が蟻通の明神としてあがめられたことになっており、元④蟻通明神といわれた奈良県吉野郡の丹生川上神社の中の社の伝説でも、草子同様、中将が後に蟻通明神となって祭られたことになっているという。したがって一般には、蟻通明神の本地は親ではなくて、中将と考えられていたようである。

いずれにしろ、以上のことから、貫之を困らせた神がなぜ「あ

りどほし」と呼ばれたかは理解できよう。ただここで気になるのは、この神の性格が両者で相違しているということである。『貫之集』では、この神の性格を「いとかしこくて、いましける」神といい、その一本では「うたてある」神といっている。『枕草子』の文脈でこれを解釈すると、前者はたいそう賢明な（かしこき）神ということになろうが、後者はどうにも解釈できない。ところが『貫之集』の文脈で考えてみると、これはなかなか微妙な表現に思われてくる。なぜならば、ここでは貫之の乗っていた馬を急に倒し、道行く人々にもこのような難儀を与えている神として登場しているのだから。したがってたいそう恐しい畏怖すべき（かしこき）神であり、それゆえにまた、困ったいやな（うたてある）神でもあったのだ。その神が貫之の奉った歌によって怒りを解いたのであるから、「かき曇り」の歌はたいそうすぐれた歌ということになろう。たとえそうでないにしても、右のような「かしこき神」を感動させ、感心させる何かを持っている歌であったということはできる。それは何か、おそらく「ありどほし」に「有りと星」と「蟻通」とを重ねて表現した興言利口、つまり機知であろう。同時にまた、その機知を味わうことのできる風流を神の持っていたことが、この詞書の面白さでもあった。

## 三

「姨捨」伝説（親棄山）の㈠難題型の話は、前章で述べた『枕草子』の系統と『貫之集』の系統に二分できる。前者は難題が主となり、それが蟻通明神の縁起と結びつく話、後者は蟻通の神域に馬を乗り入れて罰が当たり、歌徳によって許される話である。この後者の話は『枕草子』を経て『大鏡』に流れ入る。周知のように『大鏡』は大宅の世継と夏山の繁樹が話をするという形で歴史が展開される。その「雑々物語」の中で、ある人が繁樹に「都を出ていなかへいらっしゃたことがありますか」と質問したのに対し、繁樹が「遠国にはまからず。和泉の国にこそ、貫之のぬしの御任（国守として）に下りてはべりしか。『ありとほしをば思ふべしやは』と、詠まれし旅のともにもさぶらひき。雨の降りしさま」(5)などと語ったので、古草子に書かれているのを見る場合には、ずいぶん月日が経ってしまったように思うけれども、繁樹の語る話を聞いて昔にあったような心もちがして興味深かった、と叙べている。

『貫之集』では雨の降った様子はなく、貫之の奉納した歌の表の意味が、僅かにそれを連想させるだけである。ところが繁樹の語るところによると、雨まで降っている。歌が雨を呼び起こし、いつか雨の日のこととして伝承されていったのであろう。これは「あら笑止や。俄に日暮れ大雨降りて」(6)と、謡曲「蟻通」まで継承されていく。

次にこの話が書き留められるのは『俊頼口伝集』である。これは中古三十六歌仙の一人である源俊頼の書いた歌学書と伝えられ、俊頼随脳、俊祕抄または俊頼無名抄とも呼ばれている。

それには次のように述べられている。

貫之が馬にのりて和泉国に御はしますなるありどほしの明神の御前をよるくらかりけるに神の御前ともしらで通りければ馬俄にたうれて死けりいかなることにかとおどろき思て火の光にほのかにみれば神の鳥居のみえければいかなる神の御はしますとたづねければ是はありどほしの明神と申て物とがめせさせ給ふ神也もしのりながらやとをらせたまひつると人のとひければかゝる神の御はしますともしらずすぎ侍りにけりいかゞはすべきと禰宜をよびてとへばその禰宜たゞにはあらずわがまへを馬にのりながらとをるすべからくしらざればゆるしつかはすべき也しかはあれども汝和歌の道をきはめたる者也其道をあらはしてすぎば馬さだめてたつことをえてん御神の託宣なりといへり貫之たちまちに水をあみて

七曲に曲れる玉の緒を貫て蟻通しとは知すや有覧

かみにかきてやしろのはしらにおしつけておがみいりてとばかりあるほどにむまたちまちにおきて身ぶるひをしてたてりねぎゆるしたまふとてさめにけり(7)

神の鳥居があったり、神社の禰宜をよんだり、細部に相違はありながら、その大筋はほぼ『貫之集』のそれと同じ話である。ただ大きな違いはその歌にあった。『俊頼口伝集』の歌は貫之の歌ではなくて、『枕草子』に蟻通明神が夜詣でた人に現れて詠んだ歌と記されていた、その歌と同じである。それがいつか貫之の歌と伝えられて、このように書き留められたのであろう。『日本古典文学大系・枕草子』の頭註では、この歌は次のように解釈されている。

七曲りにくねった玉の紐を蟻が貫いたので、この社を蟻通明神と呼ぶとは世間は知らずにいるらしい。

したがってこの歌は、やはり『俊頼口伝集』の文脈の中に置くには相応しくない歌であった。ところがこの歌を貫之の歌とする伝承はさらに続いており、中世の『神道集』にも書き留められることになる。『神道集』は安居院唱導の正本と伝えられるもので、真福寺本、赤木文庫本、彰考館本、天理図書館本、河野本等、十数種の諸本がある。今私の手元にあるのはそのうちの一つ東洋文庫本(8)だけである。それを見ると巻第七の三十八として「蟻通明神事」が載っている。

抑蟻通明神者、欽明天王ノ御時、自大唐云ニ神璽一ト玉、大般若ニ副テ被レ渡、

という冒頭で始まるこの話は、おおよそ次のような内容である。

欽明天王の御時、大唐から神璽という玉が大般若経に副えられて渡来した。

もともとこの玉は天照太神が天下を治め給う時、第六天魔王に乞うて国を治める財としたものであった。人王の代になってからは代々の帝がこれを守ってきたが、孝照天王の御時に、天の朔女が計略をめぐらしてこの玉を盗み取って天に上り、失せてしまった。その後、秦耆（深砂）大王から玄弈三蔵の手を経

て、また日本に戻ってきた。

玄奘三蔵が仏の生まれた国に渡る時、流沙という河岸に一人の優なる美女がいて、「和僧はどのような宿願があって、これほど難所の多い道に来たのか」と問いかけた。

「我は大般若経を東の国へ渡そうと思ってきたのだ」と三蔵が答えると、美女は、

「この道はあなたのような人の通るべき道ではない。急いで引き返しなさい」と言う。

「我、生まれてから一度も禁戒を犯したことがない。それというのも、大般若経に深く志をかけているからで、特に般若心経こそ我の志すところなのだ。たとえそのために屍を流し曝すとも」と歎くと、その女人は八坂玉を取り出して「和僧、この玉に緒を貫き給え。それができたら仏生国へ送りましょう」と言う。三蔵がその玉を請い取ってみると、形は蚕繭（まゆ）に似て色は黄であった。玉の中の孔は七坂（ただ）に曲っていて、どうしても緒を通すことができない。どうしたものかと思案していると、道の傍の木の枝に機織という虫がいて「蟻腰着糸、向玉孔」と囀った。悉曇の達人の三蔵はすぐにその意を解し、得心してその傍を見ると、大蟻が草の葉に遊んでいた。三蔵は大いに喜び、この蟻を取り、糸をその蟻の腰に結びつけ玉の孔口へ押し入れたところ、間もなく蟻は一方の孔口から出てきて緒を通すことができた。

その時この女房はうち笑うかとみる間に怖しげなる鬼王の形となり、

「我は是れ大般若守護十六善神の中の秦奢大王なり。汝、此の世一世の事ならず。過去七生も此の般若心経を渡さんとせしかども、自ら深く惜しく思食経なれば、汝の命を召すこと七度なり。汝、我が頸を見よ」とてうち向ひ給へば「七曝首」を貫きて頸に懸け、三蔵に見せ給ふ、のである。それから、

「これほどに志しているうえは、我らが守護を加えて送ろう」と大王は三蔵を肩に引懸け、天竺の仏生国へ渡して大般若並びに般若心経を与え、さらに東の国へと送った。そして「この玉はおまえに与えよう。仏法東漸の理によって、大般若心経もやがて日本国へ渡るであろう。その時に経に副えてこの玉も渡してほしい。もともとこの玉は日本国のものであったが孝照天王の時、天朔女が取って天上へ持ってきたものである。それを私が所持していたものであった」と言い、さらに、

「私はひとあし先に日本国へ行って神と顕われ、般若部の守護神となろう」と誓った。

このようにして秦奢大王は日本国に渡り、神と顕われて後、紀伊国田那辺という処に蟻通明神として祀られるのである。一方あの蟻通しの玉は、欽明天皇の御時、経と共に日本に渡来し、三種の重宝の一つとなった。

ここまでが前半の部分にあたる。三種の神器の一つ八尺瓊の曲玉の由来を、蟻通しの故事に絡ませて語る話がむしろ主となり、秦奢大王が蟻通明神となって祀られる話が従となっている

この話は、神道と仏教の奇妙な習合の姿を示していて興味深い。それにしても秦耆大王がなぜここで蟻通明神と結びつくのであろうか。

『貫之集』の系列に連なる説話に、その神の性格を探ると、蟻通の神は前章でも述べたように、道行く人々に難儀をかける畏怖すべき神として語られている。一方秦耆大王（深沙大将）も、初めは護法の鬼神でありながら、時代が移るに従って道、特に水上の道をさえぎる畏怖すべき神へと変化していく。その持っている玄奘の髑髏の数も次第に増えて、二個の髑髏を袋に入れて持っているものから、七つのされこうべを紐に貫いて頸に掛けている姿へ、さらに九つのそれを頸に掛けている沙和尚または沙悟浄へと変化していく。[9]『神道集』のそれは、前述のように「七曝首」を貫いて頸に懸けていた。この髑髏の数は一章の最初に紹介しておいた大分の高瀬磨崖仏の深沙大将のそれと一致する。にもかかわらず昭和四十九年に出版された『大分の磨崖仏』（九環）では「胸に九箇の髑髏を並べて瓔珞（首飾り）とし」と説明され『豊後の磨崖仏散歩』（双林社）もそれを踏襲して「九個の髑髏を並べた首飾りをつけ」としているのは何故であろうか。もっともこの髑髏の数は必ずしも一定はしていないようで、三重の神宮寺の深沙大将像のそれは、五個のように見受けられる。

さて右のようにこの両者を見る時、この神の性格は共通する。しかもこの蟻通明神の縁起として語られる棄老説話は外来の話と目されている。それ故これらの要素が重なり合って、両者が結びついていったのではあるまいか。

ところで『神道集』の後半は、貫之の次のようなエピソードとなる。

延喜ノ帝御時、書所預紀貫之朝臣、紀国補任時、彼社ノ前ヲ不二下馬一打通程ニ、乗馬スクミテ不レ動、貫之自レ馬下侘処ニ、里ノ者共、此社ト申ハ蟻通ノ明神申ヲ、般若守護天等十六善神ノ御中ニ、秦耆大王応迹御神也、御法施候ト申、貫之聞レ之、昔ノ蟻通ノ玉ノ緒思食出給ヲ、

七坂曲レル玉ノホソヲヽハ　蟻通キト誰カシラマシ

ト読給ヲ、心経読誦シテ法楽シ奉給ハヽ、御殿ノ御前ニ奉幣シテ

カキクモリアサセモシラヌヲヽソラニ

蟻通トハ思ヘシトハ

読給ハヽ、馬ハ身振シテ立ニケリ、

この後に続いて『神道集』は、さらに蟻通明神が内裏内侍所の守護の時には、その神璽の色と同じ赤璽糸を数珠の緒にして祈念すれば願いごとが成就することを述べて終わる。

ここでは貫之が、蟻通の明神が秦耆大王応迹の神であることを聞き、昔の蟻通の玉の緒の故事を思い出して「七坂」の歌を詠んだことになっている。『枕草子』で神の詠んだ歌とされていた一首は、このようにして貫之の歌に化してしまうのである。歌そのものも『枕草子』の

七曲にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとは知らずやあ

るらん

から『俊頼口伝集』の

七曲に曲れる玉の緒を貫て蟻通しとは知すや有覧

を経て『神道集』では、

七坂曲レル玉のホソヲヽハ　蟻通キト誰カシラマシ

と変ってしまう。それから『貫之集』の、

かき曇りあやめもしらぬ大空にありどほしをば思ふべしやは

の歌も、『神道集』では、

カキクモリアサセモシラヌヲヽソラニ　蟻通トハ思ヘシトハ

と「あやめ」は「アサセ」に、「思ふべしやは」は「思ヘシトハ」に変ってしまう。流沙の河岸に美女の姿で現れた秦奢大王のことに関連させたかに見える「浅瀬」は、しかし、この歌の意味をいっそう分らないものにしてしまった。

このようにして時代と共に微妙に変化していった貫之の逸話は、謡曲「蟻通」において日本の文学として定着する。

紀貫之は従者二人を連れて、和歌三神の一つ玉津島明神に参詣の途次、「俄かに日暮れ大雨降り」「乗りたる駒さへ臥して」しまう。そこに蟻通明神が老社人の姿で、

瀟湘の夜の雨頻りに降って、遠寺の鐘の声も聞えず。何となく宮寺は。深夜の鐘の声。御燈の光なんどにこそ。神さび心も澄み渡るに。社頭を見れば燈火もなく。

と登場する。貫之は燈火を持っているその老社人を呼び止めて事情を話す。老人は驚いた風で、ここは蟻通明神の境内だが、そうと知って馬を乗り入れていたら、命もなかったろうにと語る。そして相手が貫之と知ると、「歌を詠うで神慮に御手向け候へ」とすすめる。そこで貫之は私心や邪心のない素直な心で

雨雲のたち重なれる夜半なれば。ありとほしとも。思ふべきかは。

と詠む。老社人は「あら面白の御歌や」と感動し、貫之の罪を許して馬を生きかえらせ、自分は神の姿に帰って鳥居の笠木に隠れるのだった。

と、このように梗概をまとめながら引用した本文を見れば、この謡曲「蟻通」の表現の美しさが納得されるであろう。このようにして文学にまで高められた「蟻通」ではあったが、『枕草子』を除くとこれはやはり「姨捨」とは異質の系列であった。なおこの謡曲「蟻通」には、『貫之集』と『俊頼口伝集』の両者の話ばかりではなく、『大鏡』のそれの面影も見てとることができる。だがそこで詠まれる歌は、『貫之集』『大鏡』の系列の歌であって、『枕草子』に神の詠んだと述べられている「七曲に」の歌ではなかった。謡曲の作者は、神を感動させるすぐれたものとして、前者の系列の伝承歌を選択したものと思われる。

## 四

「蟻通明神」と称せられる話のもう一つの流れは、『枕草子』『奈良絵本』「伝説」のそれである。もっともその内容はずい

ぶん違い、「親棄山」のモチーフの有無によって、『枕草子』と後二者にきれいに分離されてしまう。前述のように『枕草子』の難題話には「親棄山」のモチーフが絡み、親孝行が語られる。その点においては『今昔物語集巻五第卅二』の天竺の話と類似しており、この話の起源はインドであろうとされている。そしてこの話は、『日本昔話大成9』(10)の五二三A親棄山に分類される昔話に流れ入って、現代まで、南は沖縄から北は青森に至るまで、広域にわたり語られていたのであった。たとえば昭和五十三年五月二十日発行の『武蔵の昔話—第一集』（武蔵町教育委員会刊）にも、大分県武蔵町志和利の松原東（七十二歳）の語った昔話が「蟻通しの明神（親棄山）」として掲載されている。この話には『枕草子』のような蟻通明神の縁起はすでになく、難題型の親棄山の話だけが語られていた。

これに対して「親棄山」のモチーフの無い『奈良絵本』「伝説」（『日本昔話大成9』の五二三Bに分類されている奈良県吉野郡の蟻通明神の縁起）では、難題話と蟻通明神の縁起だけが結びつけられた形で存在していた。それを「蟻通明神のえんき」と仮りに名づけられて『室町時代物語大成第二』（角川書店）に収載されている『奈良絵本』に探ってみよう。その話の内容は、おおよそ次の通りである。

たいそう賢い帝の御時、もろこしの大王から日本の帝に勅使がたてられた。もろこしの国が帝に奉った物は、蜀江の綿、藍田の玉、懈谷の笛、泗濱の磬、さんこの盃、明月の玉など、とりどりさまざまであった。

その中に五斗をうくるほとの、大きなる、ほらがい有、口は、ひらけたりといへとも、うしろにいたり、まかれること、いくえといふはかりなし

勅使、申けるやうは、此ほらの貝、口より、うしろに、いたるまてに、五色の糸を、つらぬきとほし、もろこしに返したまはらむとこそ、そうもん申あけゝれ

もしこの難問が解けなければ、日本の国をあなどり、もろこしの国が攻め寄せることは必定のこと。

大納言は公卿、大臣を集め、どうしようかと詮議したがよい知恵が浮かばない。そこで広く殿上人たちに、何かよい思案はないものかとはかった。その時頭の中将が進み出て、孔子が陳の国における故事を話して、私が糸を通しましょうと申し上げた。

孔子の故事とは、孔子が陳の国で九曲の珠に糸を通す難題を出されて困っていた時、杜氏の娘の教えによって、その難題を解いたことであった。杜氏の娘の教えというのは「ほそき糸に、ありをつなき、珠の穴に、入給ひ、松のけふりに、ふすへ給へ」というものであった。

帝はそれをお聞きになり、感心なさって、一件を頭の中将にゆだねられた。中将はほら貝を預って宿所に帰ると、人々を山につかわして蟻を求めさせ数々の蟻を取り寄せた。だが、並の蟻では糸を結んだ蟻の腰が半ばよりちぎれて、貝に糸を通すことができない。そこで大和の国春日の宮に十七日こもり、大き

い蟻が手にはいるように祈った。それから七日たって、春日の山から二寸ほどの大きな山蟻が出てきた。中将は神の恵みと喜び、その蟻を使ってことなく五色の糸を通すことができた。そしてその恩賞として、和泉の国四万町を頂載し、右大臣に取り立てられたのであった。

その後の中将のことについて、この『奈良絵本』は、さらに次のように描いている。

頭の中将は、大臣にへあかり、一百歳のよはひをたもち、
そのゝちにいたりて、和泉の国に、帰り給ひ
ある日のことなるに、こくうのうちに、飛あかり、我はまことに、人間にあらす、日本のまもらむため、かりに、かたちをけんせしなり、いまより後も、猶〳〵、まもりの神たるへしとて、さま〳〵、きとくをあらはしつゝ、神あかりし給ひけり
国の人〳〵、きとくを、おかみ奉り、社を立て、神をいはひ、蟻通の明神と、あかめ□つるそ、ありかたき

以上の概要が語るように、ここに展開されている物語は、中世のそれの特色である本地物としての特色を示すものであった。つまり蟻通明神という神のその本を尋ねると、ひとたびは頭の中将という人間であって、それが神あがり（死）して後、蟻通明神として祀られたというのである。この神の性格を、この絵本では日本を守る「まもりの神」としている。国を守るということは、異国からの敵の侵入を防ぐことを意味する。たとえば、この絵本の次のような個所によっても、そのことは納得されよう。

されは、異国より我朝をうちとらんと、兵をそろへて、日本をせめたる事、仲哀天わうより、後醍醐の天皇の御代にいたる迄、七度におよふといへとも
神のちから、つよくまし〳〵、ひとのはかり事、かしこきによって、たひ〳〵日本は、かちいくさして、一度も、ふかくはなかりけり

これを裏返して言えば、あらゆる道を塞えることによって、敵の侵入を妨害する神ということになる。そしてこの点において、この蟻通明神は、『貫之集』『大鏡』『俊頼口伝集』謡曲「蟻通」『神道集』の系譜に連なる神ということができるのである。

この神に海外渡来の神の面影を見ていたのは、中野猛の「海外渡来の神について」（『日本文学』第三〇巻第一〇号）であった。その理由はこの型の説話の祖型が経典にあることであった。その真偽を判断する資料を、残念ながら私は持っていない。けれども、『神道集』の例などを見ると、あるいはそのように考えられていた時期があったのかとも思う。実際この神の性格とその故事は、深沙大将のそれと随分類似している。たとえば貫之の乗馬が生き返ったという話も、『望月仏教大辞典3』（昭48・世界聖典刊行協会）に引かれている次の逸話と、きわめてよく似ているのである。

大慈恩寺三蔵法師伝第一に師が沙河を渉らんとする時、四夜五日一滴の水を得ず、幾んど将に殞絶せんとし、遂に沙中に臥して観音を黙念するに、忽ち涼風を感じ、且つ其の夜睡中に一大神を夢みたることを叙し「第五夜半に至り忽ち涼風ありて身に触る、冷快にして寒水に沐するが如し。遂に目明なるを得、馬亦能く起つ。体既に蘇息し、少睡眠を得。即ち睡中に於て一大神を夢む、（略）」……。

この「一大神」が後に深沙大将と呼ばれる神となるのであるが、「馬亦能く起つ。体既に蘇息し……」というようなところは、『貫之集』のそれを思い起こさずにはいられない。もっともこの場合、「体既に蘇息し、少睡眠を得。」というのは、馬ではなくて三蔵法師であろうけれども。そして、あるいはこのようなことが、『神道集』の深沙大将蟻通明神応迹説を連想させたのかもしれないと考えるのである。そういった意味においても、確かに蟻通明神は海外渡来神の面影を残してはいる。ただ私は、『貫之集』から『奈良絵本』へと貫流するこの神に共通する、道を塞え、そこを守るという性格を考えるとき、国つ神である猿田彦や塞の神の眷族としての蟻通明神を、ふと考えてしまうのである。

さて、ここで話を『奈良絵本』の「蟻通明神のえんぎ」に戻さなければならない。この絵本はその内容が難題話であるということで、『枕草子』の系統に位置づけてみたけれども、実際は前述のように「親棄山」のモチーフを持っていない。しかもその神の性格は、『貫之集』の系列に連なるものであった。したがって、柳田国男の『桃太郎の誕生』の方法を借りて、姨捨説話をより大きな束にくくる時に、初めてその中に入れることのできる話だったのである。

ところで、この『奈良絵本』には、他に見られないもう一つの特色があった。それは、ほら貝に糸を通す方法を、老人の知恵にではなく孔子の故事に学んでいることである。この孔子の故事は、当然中国の話から取り入れられたものであろう。だが、それはどのような資料に依拠したものであろうか。おそらくそれは、宋の善郷禅師の『祖庭事苑』⑪によるものであろう。これには次のような記事があるという。

世伝、孔子厄二於陳一、穿二九曲珠一、遇二桑間女子一、授レ之以レ訣、孔子遂暁、乃以レ絲繋レ蟻、引レ之以レ蜜、而穿レ之

ここでただ一つ気になるのは、右の引用部分の蟻を蜜で誘って糸を通したという一条が、『奈良絵本』のそれでは、煙で蟻をいぶすことによって糸を通したことになっていることである。とすれば、あるいは別の資料に依ったものであろうか。いずれにしろ、このようにして、またまた中国渡来の話が蟻通明神の縁起に取りこまれることになったのであった。

〈註〉

（1）『新校群書類従　第十一巻』（昭和五十二年十月三十日覆刻版発行・名著普及会）所収『紀貫之集』三七〇ページ。

（2）（1）と同書三七一ページ。
（3）『日本古典文学大系19』（岩波書店）二六四ページ。
（4）『日本昔話事典』（昭和五十三年十二月二十日刊・弘文堂）三五ページによる。
（5）佐藤謙三校注『大鏡』（昭和四十四年十二月十日刊・角川文庫）二七三ページ。
（6）佐成謙太郎『謡曲大観』（明治書院）の「蟻通」の本文二一六ページ。
（7）『続々群書類従第十五歌文部二』（昭和四十四年十月三十一日刊・続群書類従完成会）一八八ページ。
（8）近藤喜博編『神道集』（昭和三十四年十二月五日刊・角川書店）二〇五ページ。
（9）中野美代子『孫悟空の誕生』（一九八〇年十一月五日刊・玉川大学出版部）による。
（10）関敬吾編（昭和五十四年十月二十日刊・角川書店）
（11）東洋文庫『日本お伽集2』（昭和四十八年五月二十二日刊・平凡社）の三四三ページの付録。